

疫について

大形徹

はじめに

さきに字説「醫について」^①において「疫」の文字も考察した。そこで掲げた文字は、『説文解字』の「瘧」のみであり、甲骨文・金文の字形はないとして考察し、六書のうちの形声文字としてとらえた。

けれども、じつは「疫」には甲骨文があった。一九八三年に、温少峰、袁庭棟編著『殷墟卜辞研究』^②三二四頁にその考察があり、一九九九年二〇〇四、一二『古文字詁林』^③にその説が紹介され、二〇〇八年二〇一九、一番玉坤主編『古文字考釋提要總覽』^④にも拓本の図版をつけて収められている。たんなる異説ではなく、すでにその説は認知されているといつてよい。また二〇〇三年発行の『殷墟花園莊東地甲骨』にも「疫」の字形を紹介し、さらに二〇〇四年発行の『六体書法大字典』^⑤は別の字形を「疫」として紹介している。

しかしながら、加藤常賢『漢字の起源』、白川静『字統』・『字通』・『漢字の体系』、水上静夫『甲骨金文辞典』、李学勤『字源』、于省吾主編、姚孝遂按語編撰『甲骨文字詁林』、落合淳思『甲骨文字小字典』・『漢文字形史小字典』等々、日中の甲骨文を扱う字書や書物には、甲骨文的「疫」は

採録されていない。字書を作成した時点では甲骨文的「疫」の存在に気づいていなかったか、その文字を「疫」とは認めなかったということになる。本稿は「疫」の甲骨文があったということをもふまえて再考察したい。

一、前稿『「醫について」八、疫』

まず、前稿でどのように考察したのかを掲げる。

八、疫

『説文解字』卷七下は、

民皆な疾（や）むなり。疒に从い役の省聲^⑥

とする。

「疒」と「疫」ではなく「役」の省略形だとする。

『字通』は、

〔字音〕エキ 〔字訓〕えやみ

説文解字

〔形声〕声符は役（えき）の省声。〔説文〕七下に「民皆疾（や）」

むなり」とあり、流行病をいう。

〔訓義〕

1. えやみ、はやり病。癘鬼のなすところであるとして、えやみはらいの讎が行われた。

〔古訓〕〔名義抄〕疫 エヤミ・トキノケ

という。

白川は「形声」とする。『説文』が「役（エキ・ヤク）」の省声とするのにもとづくのだろう。形声であるならば、「疫」の中の「殳」は「役」という音であり、「殳」の意味は含まない。けれども、「疾」の「矢」と「疫」の「殳」は、その役割が似ていないだろうか。いずれも武器であり、「矢」も「殳」も悪鬼を追いはらう意味がある。そして次に取り上げる「醫」には「矢」と「殳」の両方が含まれているのである。

形声文字の声符の部分には漢字としての意味はなく純粹に音だけを利用した。形声文字の一般的解釈であろう。それに対して、白川は形声文字を会意文字のようにとらえることがあり、会意兼形声とも呼ぶうる解釈を示すことがある。しかし、この「疫」に関しては形声文字とするのみで、会意的解釈は示さない。

前稿の拙論では、「形声であるならば、「疫」の中の「殳」は「役」という音であり、「殳」の意味は含まない。けれども、「疾」の「矢」

と「疫」の「殳」は、その役割が似ていないだろうか。いずれも武器であり、「矢」も「殳」も悪鬼を追いはらう意味がある。そして次に取り上げる「醫」には「矢」と「殳」の両方が含まれているのである」と、形声ではあっても、会意的解釈が可能ではないか、と述べた。

二、会意兼形声という考え方

『説文解字』の六書（象形・指事・会意・形声・転注・仮借）の分類は、紀元前一三〇〇年あたりに甲骨文ができてから、一〇〇〇年以上もあとの後漢の許慎（五八年頃―一四七頃）が考え出したものである。許慎は「六」を尊んだため、まず「六書」という枠組みを作ってから内容を考えたのかもしれない。六書のうち字形に関係するものは、象形・指事・会意・形声であろうが、殷人が文字を作った当初は、当然、そういった分類とは無関係である。分類するとわかりやすくなるが、それに該当しない事例を切り捨てたり、歪めたりすることにもなる。その一例が「会意兼形声」である。要するに形声文字と分類されていても、「声」の部分に意味があると考える事もできるのである。

さらに「疫」に甲骨文が存在するとなると、従来、形声文字に分類されていたが、会意文字あるいは会意兼形声文字であるかもしれないことになる。つまり、「殳」の部分に意味をもたせてもよいということになる。また、会意・形声などの文字も、その構成要素に分解すれば、そのそれぞれが象形であることも多い。また全体をあわせて、何かを行なっている様子とみてもよいものがある。

拙稿でとりあげる「疫」の甲骨文に関していえば、「疒」は「牀（ベッ

「ド」で寝ている人であり、「𠄎」は右手で叩いている様子である。全体をあわせると、病で寝ている人を叩いているようすである。これを当時の疾病観⁸⁾に重ねてみれば、病で寝ている人に取り憑いている悪鬼(悪霊)を叩いて追い払うという構造になっているとわかる。

また「𠄎」の甲骨文は、「疫」の甲骨文から、「牀(ベッド)」の部分をとり除いた形である。「疫」の場合は、寝ている人だが、「𠄎」の場合は、起きている人なのだろう。

三、これまでの「疫」説と『殷墟卜辞研究』の「疫」説

さて、はじめにでとりあげた『殷墟卜辞研究』では「疫」を甲骨文としてとらえている。まず、その部分を紹介する。

甲骨文中にまた「𠄎」の文字がある。もと解釈はなかった。思うにこの字は𠄎に从うが、これは疒であり、𠄎に从うのは、𠄎である。隸定して「疫」になる。卜辞にいう、

(180) 𠄎子卜、𠄎(𠄎)……(疫)……女……(《乙》八八七三)

この辭は残欠しているが、これは御祭を挙行して疫病を除くかどうかを卜問する辭であるはずだ。

ここで、この文字「𠄎」を疫と解釈している。この文字の拓本は乙編八八七三にある。その写真は後出の表にかかげる。これは「𠄎」

と「𠄎」からなる文字だという。「𠄎」の部分に関しては、徐中舒は「𠄎」だとみている。どちらも手に何かをもつ形である。

「御祭」について、王国維は「御」の字は、おそらく禦の字の意味で使われる¹⁰⁾とし、楊樹達は「此れ皆な人に疾病有るを以て御祀を行う者なり」としている。鄭慧生にはそれらをまとめた「商代の御祭」がある。要するに疫病を禦ぐための祭祀ということになる。

白川静は御を

「字音」ギョ・ゴ 「字訓」むかえる・ふせぐ・もちいる・つかえる

「形声」声符は卸(しや)。卸は御の初文。卜辞や金文には多くの形を用いる。字はもと午と𠄎(せつ)とに従い、午は杵形の呪器。これを𠄎(𠄎)して神を降ろし迎え、邪悪を防いだ。ゆえに「むかう」「ふせぐ」が字の初義。卜辞に「茲(こ)れを御(もち)ひよ」、金文に「事(まつり)に御(もち)ふ」「厥(そ)の辟(きみ)に御(つか)ふ」のようにいう。



とあり、邪悪なものを禦ぐという。邪悪なものというのは、病因としての悪鬼・邪鬼などをイメージしていると思われる。

これらを総合すると、御祭・御祀は、疫病を起こす原因となる悪鬼・邪鬼を禦ぐ祭祀ということになる。


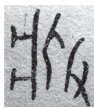
なお、文字の形としては以下のようになっている¹³⁾。なお、この杵形の午の甲骨の形のを半分になると後で考察する棒の上につく形

に似ている。

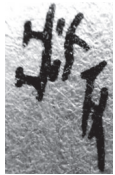
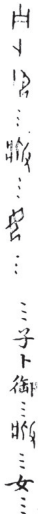

疫について

甲骨	金文	説文
		

書名	出版年	作者	字形	内 容	六書	備考 ※は大形のコメント
漢字の起源	1970	加藤常賢	甲骨文「疫」なし。	<p>【疫】 字形 説文に言うとおりに「疒」に従ひ(意符)役の省声(声符)の形声字である。徐灝が広雅に「疫は病なり」と、蓋し古文は省せず(段注箋)と言うごとく「疫」字があるから、「役」を声符とすることは明白である。 字音 「營隻切」(エキ)の音である。「役」がこの音を表わす。この音の表わす意味は、積名の積天に疫は役なり、鬼の行役あるなり。とあるごとく「巡行」の意を表わしている(次項の役字を参照)。字林には疫は疾の流行なり。とある。流行・巡行のごとく、相序いで人々が病気になる(人病相注(つ)ぐ、玄応の一切経音義、卷二十)ことである。 字義 人が相序いで病気になることである。積名に「鬼の行役」というのは、古代では病気は鬼の仕業と考えたからである。</p>	形声	角川書店
甲骨文合集	1977-1982	郭沫若主編；中國社會科學院歷史研究所編	甲骨文	 <p>乙編図版 8873 15.0.290 15.0.295</p>		中華書局 ※釋文はないので、「疫」かどうかは不明。 ※文字の構造は、汗を流し病の床に伏せている病

				 <p>合集番号 21057</p>		<p>人に取り憑いている悪鬼を 爻で打って追いはらっている 様子だろう。悪鬼は目に みえないため、病人を爻 で打つような形になるの ではないか。</p>
殷墟卜辞研究	1983	温少峰、袁庭棟編著	甲骨文「疫」	<p>甲骨文中又有一 𠄎「疫」字。旧不釋。按此字 从 𠄎即疒、从 爻即爻、可 隸定為「疫」。卜辞云、 (180) 𠄎子卜、𠄎(𠄎) … 𠄎 (疫) …… 女 …… 《乙》 八八七三) 此辭已殘、當是卜問是否舉行 御祭以除疫病之辭。</p>		<p>社會科學研究 叢刊、19、四 川省社會科學 院 出版 社、 1983、科學技 術篇 ※手書きの文 字。拓本なし。</p>
字統	1984 [新訂字統2007]	白川静	甲骨文「疫」なし。	<p>エキ 疫。えやみ 形声 声符は役の省略形。[説文] 七下に「民皆疾むなり」という。役はもと呪的な意味をもつ巡行の義であったと思われるが、疫はたとえば疫病神などによって流行するものと考えられた。[周礼、夏官、方相氏] に、「熊皮を蒙り、黄金四目、玄衣朱裳、戈を執り盾を揚げ、百隸を帥ゐて時に難(難)し、以て室を索めて毆疫す」とみえる。疫は鬼癘のなすところとされていたので、難祭をもってこれを祓った。</p>	形声	<p>新訂では、アンダーライン部分を付加</p>
甲骨文字典	1988	徐中舒	 <p>見出し</p>	<p>一期乙八八七三 [解字] 從疒從 爻 支，《説文》所無。</p>		<p>※「疫」と解釈せず、義不明とする。</p>

疫について

				本文 〔釋義〕義不明。 乙八八七三		※ 見出しの文字と本文の文字が同じではない。合集で確認すると本文の方が近いが、やはり、少し異なる。本文には人と床の間に汗をあらわす点が見える。「疫」ではなく、「支」ととらえているため、「疫」とは認識していない。
殷墟甲骨刻辭類纂	1989.1	姚孝遂主編；肖丁副主編		三一九九三，屯附三 疾父乙豕妣壬豚 作 𠄎 父乙豕妣壬豚兄乙豚化… 兄甲豚父庚犬		吉林大學古籍研究所叢刊，6 中華書局， ※この文字のみ積さず、そのままの形で載せる。 ※疾とともにみえる。 ※「疫」にみえる。
甲骨金文辭典	1995	水上静夫	甲骨文「疫」なし。	項目なし。		
字通	1996	白川静	甲骨文「疫」なし。	常【疫】9画 0014 〔字音〕エキ 〔字訓〕えやみ 〔形声〕声符は役（えき）の省声。〔説文〕七下に「民皆疾（や）むなり」とあり、流行病をいう。 〔訓義〕 1. えやみ、はやり病。疫鬼のなすところであるとして、えやみはらいの難が行われた。 〔古訓〕〔名義抄〕疫 エヤミ・トキノケ	形声	

甲骨文合集釋文	1999	胡厚宣主編；王宇信，楊升南總審校		合集番号 21057（一期乙 8873） (1) □子卜、疾…女… 一 (2) …羊…女… 一 ※疫ではなく、疾と解している。	中国社会科学出版社
古文字詁林	1999.12-2004.12	古文字詁林編纂委員會編纂	甲骨文「疫」あり。	前掲『殷墟卜辞研究』の説を引用。	上海教育出版社 ※ここではじめて『殷墟卜辞研究』(1983)の説が認知された。
殷墟花園莊東地甲骨第二分冊	2003.12	中國社會科學院考古研究所		(14) 己卜：子其疫，弔往其學？一 (181 (H3:556) 龜腹甲編著拓本圖版 167, 模本圖版 167, 照片圖版 189)	雲南人民出版社 ※拓本には人の背の部分に汗をあらわす点が見える。
六体書法字典	2004.7	田其澁編		屯附 3 [小屯南地甲骨中國社會科學院考古研究所編，中華書局，1980.10，附冊]	湖南人民出版社 1369 頁 ※「疫」。『殷墟卜辞研究』の字形とは左右反転した字形である。 ※『甲骨文合集補編』語文出版社，1997 は解釈せず。
古文字考釋提要總覽	2008.8-2011.1.	潘玉坤主編		※『殷墟卜辞研究』を引用する。文字は原本の拓本から。	上海人民出版社，第 1～4 冊
字源	2012	李学勤主編	甲骨文「疫」なし。	 《说文》小篆 楷书	形声 天津古籍出版社

<p>中国漢字文物大系</p>	<p>2013</p>	<p>劉志基主編 全 15 卷</p>	 <p>秦隸</p>   <p>楷書</p>	<p>睡虎地秦墓竹簡・日書 甲種 37 背，戰國至秦 一宅中毋（無）故而室人皆疫， 或死或病，是是棘鬼在焉。 楚簡假「役」為「疫」。以下 容成氏の例をひく。</p> <p>崔君妻李金墓誌 唐 遇穀貴大疫</p> <p>王志訥墓誌 唐 以詔聖元年五月廿日染疫</p>	<p>大象出版社 疫の隸書か。 ※疫は疫病にかかること。 ※棘鬼。</p>
<p>秦漢六朝字形譜 7</p>	<p>2019</p>	<p>臧克和・郭瑞主編</p>	 <p>秦隸</p>	<p>睡・日甲・《詒》40 ○人皆疫多嘗（夢）</p>	<p>華東師範大學出版社 ※秦漢六朝なので殷周は含まず。</p>
<p>同</p>	<p>同</p>	<p>同</p>	 <p>隸書</p>	<p>銀貳 1744 ○取邑疫可以回</p>	

四、役・疫

甲骨文の文字例をみるかぎり、文字の部首は「にんべん」であり、「ぎょうにんべん」ではない。これは手に持った棒状のもので、人の背を叩いている様子である。その棒の先には白抜き（はく抜き）の楕円であらわされたものがついている。隸書は、簡帛文字の「役」が一例あるものの、他はすべて、ぎょうにんべんである。

饒宗頤は、

丁酉卜、即貞。其𠄎（役）豕十、妣丁。〔『青華』九・二〕

について、「按ずるに役、讀みて疫と為す、疫氣有るを殆（うたが）えば、乃ち卜して豕十を妣丁に用い、以て之を禳（はら）う（14）」。〔『通考』九八七葉〕とみえる。

つまり、妣丁という祖先神にお願いして、疫鬼をはらってもらおうということであろう。

饒宗頤は、もう一つ例をあげている。


卜辭、甲子卜、貞、疒役（疫）不征（延）。：

「按ずるに「役」、『説文』古文、人に従う。乃ち役は乃ち役の字。他の辭を考するに云う、「……貞役」〔『前編』六、一二、四〕は、役讀みて瘥（ちや）為るを知る。『廣雅』に「瘥、病也」と。瘥即ち疫。疒は猶お

疫を禦ぐと言うがごとし。『漢書』郊祀志に「以御蠱災」。『正義』に謂う、『蠱は熱毒惡氣の人を傷害を為すものなり』。左昭元年、傳、杜注に『凡そ厲氣傳疾なる者は、皆、之を蠱と謂う可し』と。辭に言う、『疾疫延びず』と。即ち傳染病の蔓延するやと否（しか）らざるやを卜う。〔通考一一五——一六葉〕


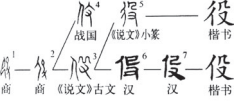
ここでは、「役」「疫」「瘥」が同じであると述べる。また、それは蠱（15）と同じだといい、それを「氣」ととらえる。そして全体を傳染病の蔓延がおきるかどうか、という占いだとみている。

「役」は、本来、「役」の文字の形であり、そこから派生して「役」の文字になり、意味もずれていつている。「役」に「牀」を足せば「疫」になる。

書名	出版年	作者	字形	内 容	六書	備考
甲骨文 詁林	1996.5	干省吾主 編		饒宗頤 「丁酉卜、即貞。其𠄎(役)豕十、妣丁」。(『青華』九・二) 按役讀為疫、殆有疫氣、乃卜用豕十于妣丁、以禳之。(『通考』九八七葉)		以下、疫と関連付けるもののみ。
				饒宗頤 卜辭、甲子卜、𠄎貞、疒役(疫)不𠄎(延)。… 按「役」、『說文』古文从人、乃役乃役字。考他辭云、「……邛貞役」。(『前編』六、一二、四)知役讀為疫。『廣雅』、「疫、病邛也」。疫即疫。疒猶言禦疫。『漢書』郊祀志「以御蠱災」。『正義』謂、「蠱者熱毒惡氣為傷害人」。 左昭元年傳杜注、「凡厲氣傳疾者、皆可謂之蠱」。辭言、「疾疫不延」、即卜傳染病之蔓延與否也」。(通考一一五一—一六葉)		cf『史記』封禪書 磔狗邑四門以禦蠱菑(索隱案、樂彦云、左傳皿蟲為蠱、臯磔之鬼亦為蠱。故月令云、大雩旁磔註云、磔攘也。厲鬼亦為蠱、將出害人。旁磔於四方之門、故此亦磔狗邑四門也。風俗通云、殺犬磔攘也)

字通	1996.10	白川静	 <p>甲骨 甲骨 説文 古文</p>	<p>【役】〔役〕 [字音] ヤク・エキ [字訓] えだち・いくさ・やく・しごと・めしつかい [会意] 彳(てき) + 殳(しゆ)。〔説文〕三下に「邊を成(まも)るなり」と成役の意とし、古文役を録する。殳は投(しゆ)で、矛の類。〔繫傳〕殳部三下、投字条に「司馬法に曰く、羽を執るに投を以てす」とあり、羽を呪杖の上に著けて、巡行のときに用いた。征成・行役のときにも、それを用いたのであろう。のち役務一般のことをいう。卜文に、人に殳を加える字形があるが、役の字との関係は明らかでない。 → 殳 [訓義] 1. 呪杖をとってめぐる、みはり。 2. いくさ、たたかい、さきもり、まもり、えだち。 3. やく、しごと、つとめ、しわざ。 4. めしつかい、つかう、つかえる。</p>	会意	<p>※甲骨の字形は殳で人の背を叩くもの。人は跪くものもある。 ※白川は羽を呪杖の上につけるといふ。 ※羽については、殳のところで説明される。</p>
戦國秦漢簡帛古書通假字彙纂	2012.5	白於藍編著		<p>役字聲系 役與疫 《容成氏》: 壹(當)是時也、𩇛(癘)役(疫)不至, 祆(妖)兼兼(祥)行, 桀(禍)才(災)法(去)亡, 矜(禽)獸肥大, 卉木晉長。”《稱》: “疾役(疫)可發澤, 禁也。” 《阜春八》: “民役(疫)歲饑, 翟人攻我二(我, 我)將奈何? 《閻氏》: “萬物皆興, 歲乃大胃(熟), 年讐(壽)益久(引), 民不疾役(疫)。”按, “役(疫)”字從晏昌貴《虎溪山漢簡〈閻氏五勝〉校釋》(《長江學術》第五輯, 長江文藝出版社, 2003年)、劉樂賢《虎溪山漢簡〈閻氏五勝〉及相關問題》(《文物》2003年7期)讀。</p>	假借	福建人民出版社

疫について


<p>字源</p>	<p>2013.7</p>	<p>李学勤主编</p>		<p>役 yì 喻纽、锡部；以纽、昔韵、营只切。</p>  <p>1、2《甲文编》134页。3、5《说文》66页。4《汗简》21页。6、7《篆隶表》206页。</p> <p>會意兼形聲字。商代甲骨文從人、從受、受亦聲。表意偏旁人為象形字、表示役的本義與人有關、形旁兼聲旁受為又持械具、表示役的本義與動作有關且表音、役與受并舌音。在商代、從人或作從卩(jie)、構意相同、卩為人之跪跽是者(作𠄎)、構意與從人相同。戰國時、構件受或作支、屬於形義相近偏旁之通用、不影響構意、象形的𠄎變易為線條化的𠄎。商代到戰國的這種結構一直沿用到後代、楷書作役。</p>	<p>會意兼形聲字</p> <p>天津古籍出版社 ※ここでは、會意兼形聲とされている。意味を表わす偏旁の人は象形文字であり、その人の背を何かで叩く様子にみえる。</p>
-----------	---------------	--------------	-----------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------





五、倂

「倂」と「役」は文字の形がよく似ている。どちらも、手に持った棒状のもので人の背を叩いている様子である。

『字通』は、「[会意] 人＋水＋支（ぼく）。水は水滴の形に作る。人の背後に水をかけ、これを滌（あら）う意で、身を清めること、みそぎをいう。〔説文〕三下に「行水なり」とあり、〔段注〕に、「唐本」に「水行くこと倂倂たり」とあるによって「行水倂倂たり」に作るべしというが、流水の意ではない。修・滌の字は倂に従い、清めて無垢の状を修、洗うものを滌（でき）、そのとき用いる枝葉を條（条）という。悠とはその修潔の心意をいう」という。


水滴にみえることを重視して、水による禊とむすびつける。けれども、人の背を叩くようにみえることには注意ははらわれず、「人の背後に水をかけ、これを滌（あら）う意で、身を清めること、みそぎをいう」と解する。他の「支」の意味を考えれば、これも背を叩き、取り憑いた悪霊を祓う事ではないだろうか。それがみそぎにつながるように思われる。

書名	出版年	作者	字形	内容	六書	備考
字通	1996	白川静	 <p>甲骨 1 金文 1 金文 2 金文 3</p>	<p>【倂】 7画 2824</p> <p>[字音] ユウ (イウ) [字訓] みそぎ・ゆるやか・ところ</p> <p>[会意] 人＋水＋支（ぼく）。水は水滴の形に作る。人の背後に水をかけ、これを滌（あら）う意で、身を清めること、みそぎをいう。〔説文〕三下に「行水なり」とあり、〔段注〕に、「唐本」に「水行くこと倂倂たり」とあるによって「行水倂倂たり」に作るべしというが、流水の意ではない。修・滌の字は倂に従い、清めて無垢の状を修、洗うものを滌（でき）、そのとき用いる枝葉を條（条）という。悠とはその修潔の心意をいう。徐鍇の説に、秦の刻石の字形によって、水中に杖つく意とするのは臆</p>	会意	※倂と倂は爰と支だけの差であり、似た形である。

			 説文 1  説文 2	<p>説である。また「攸(もつ)て」「攸(ところ)」のように用いるのは音の仮借である。</p>		
修			 説文 	<p>[字音] シュウ (シウ)・シュ [字訓] きよめる・おさめる [会意] 攸(ゆう) + 彡(さん)。 攸は人の背後に水をかけて洗う形で、みそぎをすること。彡は清められたことを示す記号的な文字。修祓を示す字である。〔説文〕九上に「飾るなり」とあり、弘飾する意。修祓・修禊が字の本義。それより修治・修理の意となり、修辞・修撰の意となる。修祓のとき用いるものは條(条)、それで滌(あら)うことを滌(でき)という。 →攸・彡 [訓義] 1. きよめる、はらう、ぬぐう。 2. おさめる、おこなう、しあげる。 3. つくろう、なおす、かざる。 4. ならう、もうける。 5. よい、うやまう、すぐれる。 6. 脩と通じ、ながい、たかい。</p>	会意	『説文解字』飾也。从彡攸聲息流切。※攸に彡がついたものが修である。修祓にその意味がみえる。

六、爰について

「支」と「爰」はどちらも、棒状のものを手でもつ形である。「爰」は、その棒の先には白抜きの楕円であらわされたものがついている。ここでは『字通』より、その説明の部分を紹介する。「爰」の上の部分は「九（しゅ）」は「説文」三下に「鳥の短羽、飛ぶこと九九たるなり」とみえることから、鳥の羽だとされている。そして『司馬法』の羽飾りの例、『周禮』の旌旗にも羽飾りがある例から、羽は呪飾として用いたとする。ただ、先にも述べたように、杵形の呪器とされる午（杵）の形の半分にも似ている。

書名	出版年	作者	字形	内容	六書	備考
字通	1996	白川静		<p>【爰】4画 7740 [字音] シュ [字訓] つえぼこ [会意] 九（しゅ）+又（ゆう）。九は〔説文〕三下に「鳥の短羽、飛ぶこと九九たるなり」とみえる。〔説文〕三下に爰を九声とし、「杖を以て人を殊（ころ）すなり」（段注本）と殊殺の意とするが、杖矛の類である。〔周礼、考工記、廬人〕に「戈（ほこ）の秘（ひ）（柄）六尺有六寸、爰の長さは尋有四尺（一丈二尺）」とあり、積竹を八觚（こ）の形にして作り、刃の無いものである。わが国の竹刀に似たものであるらしい。これを車上に樹てて、鹵簿（ろぼ）の先驅とした。〔詩、衛風、伯兮〕に「伯や爰を執り 王の爲に先驅す」とみえる。〔説文〕はこの部の 棓（しゅ）字条に「軍中の士、持する所</p>		

の笏（つゑぼこ）なり。～司馬法に曰く、羽を執りて投に従ふ」とあり、上端に羽飾りをつけるものであるらしい。羽は呪飾として用い、〔周礼、春官、司常〕に「全羽を旒（すい）と爲す」とあって、旌旗にも羽飾りを用いた。これによっていえば、笏とはその呪杖をもつ意で、わが国の「毛やり矛（ぼこ）」のようなものであろう。投がその毛やり矛、投は投（ほこ）を扱う意の字であらう。

〔訓義〕

1. つゑぼこ。
2. 矛の柄、さお。
3. 干戚（かんせき）（たて）のように、持って舞う。

〔古訓〕〔名義抄〕笏 ホコ

〔篇立〕笏 ホコ・ツエ

〔部首〕〔説文〕に投・投・毆（毆）・毆・毆・毆・毅・役など十九字を属し、重文一。〔玉篇〕に二十字を属する。みな笏を以て毆（う）つことを示す字で、呪的な意味をもつ行為をいう。毆は區（秘密の祈りの場所）で、毆は頭、毆は臀（しり）をたたく。毆は医（治療）に従い、治療するとき、毅は軍戯に関する字である。次部に殺・弑を録するが、殺・弑は杀（崇（たたり）をなす獸）に対して行う呪的な方法をいう。これらのことから考えると、笏は呪杖の類であらうと思われる。

〔声系〕〔説文〕に笏声として投・殺・股・毆・投（毆）の諸字を収めるが、股・殺などは別の声の字である。

〔語系〕笏・投

zjio は同声。また投（毆）do は声近く、〔説文〕十二上に「擿（う）つなり」とあり、毆の字形などからも考えて、もと呪的な意味をもつ字であらう。（以下略）

おわりに

疫の文字は、甲骨文には三例みえる。温少峰等が一九八三年に発表した論文で「旧不釋」とあったものを「疫」と解釈したことにより、はじめで認識された。それ以前の字書はすべて、甲骨文には「疫」の文字がなく、「役」がそれにあたるとしていた。一九八三年以後の字書も温の説に留意するものはなく、『甲骨文詁林』にすら引かれていない。『古文字詁林』に至って、ようやく収録され、説として認められたようにみえる。その後、『殷墟花園東地甲骨』にも「疫」を載せ、『六体書法大字典』は、屯附3の「疫」の字形を収録し、現在のところ、「疫」の甲骨文は三例あるということになる。

一方、「役」の甲骨文が「疫」の意味で使用されているという従来の説も成り立つ。ただ、第一期の「疫」の例が確認されたため、「役」は「疫」の仮借とみなしうる。この文字は現在、「ぎょうにんべん」であるが、甲骨文をみる限り、「にんべん」である。人を手にもつ棒で叩いているようにみえる。そのことから、人を殴打して使役しているようすだと説明されている。その説明も可能であろう。しかし、人の体に取り憑いた悪鬼（悪霊）を追ひ払うために打つ、とも解釈できる。棒の上には白抜ききの楕円であらわされたものがついている。白川静は、これを鳥の羽とみて呪飾とみる。あるいは午（杵）の形の半分の形にもみえ、そうならば御（禦）にも通じ、辟邪の意味をもつことになる。「疫」は、汗を流して高熱で苦しむ病人に取り憑く目に見えない悪鬼を「疫」で撃ち、悪鬼を追ひ払おうとしている文字の構造である。

もちろん、病人を使役させることにはならない。そう考えると、「役」もまた人に取り憑いた悪鬼を撃つことで追ひ払う様子にとらえることもできるだろう。「疫」も「役」も本来は呪術的治療行為であったものが、疫病をおこす疫鬼の意味へと意味がずれていったと思われる。白川静は字通で「周礼、夏官、方相氏」に、「熊皮を蒙り、黄金四目、玄衣朱裳、戈を執り盾を揚げ、百隸を帥めて時に難（難）し、以て室を求めて疫疫す。疫は鬼癘のなすところとされていたので、難祭をもつてこれを祓った」と説明する。

これは感染症の予防として呪術を行なったということになる。『後漢書（續漢書）』礼儀志は、大難に逐疫することを記す。その注に『漢舊儀』を引き、「赤丸・五穀を以て之を播灑す」と述べる。漢張機撰、嘉興徐彬註『金匱要畧論註』卷十、赤丸方は、寒氣厥逆に効果があるとされる中薬である。茯苓・半夏・烏頭・細辛を用い、真朱もて色を為すとあり、朱すなわち、水銀の原石の丹砂で赤い色をつけていた。茯苓・半夏・烏頭・細辛の薬物的効果に加えて、朱の殺菌作用もあったと思われる。そういった薬物を禁中にまくことは疫病すなわち感染症に対する予防的效果もあったと思われる。難は日本にも追難として伝わり、呪術的な体裁を帯びた儀式である。しかし、赤丸の例をみると、感染症対策として大規模に消毒を行なうことに似ていることに気づくのである。

注

(1) 【字説】醫について（大形徹）『漢字学研究』第七号、立命館大学白川

- 静記念東洋文字文化研究所、二〇一九。
- (2) 温少峰、袁庭棟編著『社會科學研究叢刊、一九』四川省社會科學院出版社、1983、科學技術篇。
- (3) 古文字詁林編纂委員會編纂、上海教育出版社。
- (4) 上海人民出版社。
- (5) 田其湜編、湖南人民出版社、二〇〇四。
- (6) 民皆疾也。从疒役省聲。
- (7) 中国の論考の中に、この言い方がみえる。
- (8) 拙稿「鬼」系の病因論―新出土資料を中心として、大阪府立大学紀要人文・社会科学(四三)、一、一五頁、一九九五年を参照。
- (9) 中国語の原文は後出の表を参照。
- (10) 『戲壽堂所藏殷虛文字』廣倉學君、一九一八・一九一九、「正編」、攷釋、「図版」、一二頁下。「御字蓋假為禦字」。
- (11) 『積微居甲文説：卜辭瑣記』釋御、中國科學院出版、一九五四、一七、一八頁。
- (12) 鄭慧生「商代的御祭」、王宇信、宋鎮豪主編『紀念殷墟甲骨文發現一百週年國際學術研討會論文集』、社會科學文獻出版社、二〇〇三年、五〇三、五〇四頁。
- (13) いずれも『字通』御から。
- (14) 中国語の原文は後出の表を参照。
- (15) 蠱については、拙著『魂のありか』(角川書店、二〇〇〇年)第三章を参照。
- (16) 拙稿「疫鬼について…顧頌氏の三子を中心にして」、『人文学論集』、一九九八、一六、七一、七八頁。

(立命館大學衣笠總合研究機構特別招聘研究教授)

